

特集

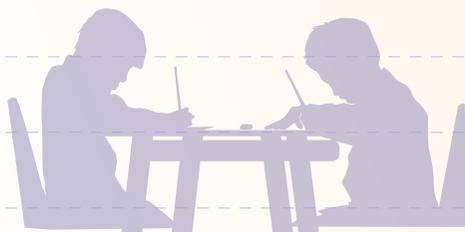
「統一合判」 中学入試レポート vol. 3

“私学の校風”を 感じてみよう。

～わが子に合ったタイプの 私学を探すために～

5年生の「統一合判」テストも今回で3回目。大勢の仲間が集まって力を競う、こうしたテストの雰囲気や形式にも、ようやく慣れてきたのではないのでしょうか。これから再来年2月の入試本番までに、保護者の皆さんは、さまざまな情報を入手しながら、わが子の受験校を考えていくことになります。

今回は「私学の校風」を感じてみよう。～わが子に合ったタイプの私学を探すために～」と題し、ベストの受験校を選ぶうえでのヒントとなる、私立中高一貫校の校風やカラーの違い、さらに私立ならではの男子校、女子校、共学校についてご紹介します。



首都圏模試センター

私学特有の校訓・校是からわが子に合ったユニークな校風を感じ取る

いざ中学受験！と思い立ってはみたものの、実際は「どの学校を受験したらいいの？」といった相談が毎年多く寄せられます。高校や大学受験とは異なり、中学受験をするのはまだ年端も行かぬ小学生。つまり「学校選び」については、保護者の皆さんが主体となって進める必要があります。

中学受験の学校選びにあたって、意識すべき最大のポイントとは一体なんでしょう。それはズバリ「わが子にあった学校かどうか」ということにつきます。

「わが子にあった学校」にもいくつかの観点がありますが、最も大切なことは、それぞれの学校の「校風」や「カラー」がわが子に合っているのか、ということです。この点を重視して「偏差値や進学実績だけにとらわれない学校選び」をすることが、充実した6年間を過ごすうえで最大の秘訣となります。

あるミッション系女子校の校長先生は「校風とは、まさに風のようなもの。たとえば校内をしばらく歩いてみると、肌で感じられるような雰囲気です。在校生の様子や表情からも感じられるものだと思います」と言います。つまり私学にとっての「校風」や「カラー」は、創立者による「建学の理念（＝教育理念）」と、教職員や生徒、保護者、卒業生（OBやOG）などの学

園に関わったすべての人々によって、長い年月をかけて育まれてきたものなのです。

たしかに「校風」や「カラー」は公立学校にも存在します。しかし約10年のスパンで教員が転勤を余儀なくされる公立中高とは違い、私学には創設から連綿と受け継がれ、熟成されてきた独自の風土があります。それが各私学の「校訓」や「校是」に反映されている場合もあれば、「校風」や「カラー」を育む土壌にもなっているのです。

男子最難関校である●開成が、教育理念として掲げるなかに「ベンは剣よりも強し」と「質実剛健」という言葉があります。前者は19世紀にイギリスで活躍した小説家・エドワード・ブルワー＝リットンという言葉ですが、同校の校章にもなっていることで知られています。「どんな力にも屈することのない学問・言論の優位を信じる」という同校の精神として、大切に引き継がれています。

「質実剛健」とは「飾りがなく誠実で、心身共にたくましく健やかなこと」を意味します。激動の社会で、進取の気性を持ち、時代に立ち向かっていくためには、自身の中に揺るぎない内面が必要、と考える同校の姿勢を表した言葉と言えるでしょう。他にも●巣鴨や●攻玉社など、この「質実剛健」を生徒の理想像に掲げる男子校は複数あります。

◎東京都市大学等々力など、複数の学校が教育の柱としているのが「ノブレス・オブリージュ」です。本来は「身分の高い者（貴族）に伴う義務



開成のシンボルでもある「ベン剣」は男子中学受験生にとっても憧れの存在（左は同校の入試風景）



特集 “私学の校風”を感じてみよう。 ～わが子に合ったタイプの私学を探すために～

という意味のフランス語ですが、地位や階級の向上を望むのではなく、自分の行動に誇りを持ち、気高く生きる、つまり品性を磨くことで培われる人間力の向上と、それに伴う社会貢献（奉仕）を推奨しています。

“日本のセメント王”としても知られる大実業家・浅野總一郎により創設された●浅野の校訓は「九転十起」です。これは周囲の反対を押し切り、商人の道へと身を投じた創設者が、失敗を繰り返しながらも、最後は不屈の精神で成功を収めた半生を表現した造語です。この言葉には、創設者のように社会の荒波にも負けない強い人間に育ってほしいと願う同校の想いが込められています。

首都圏に4つの女子中高一貫校を有する大妻女子大学系列（大妻、大妻多摩、大妻中野、大妻嵐山）の校訓は「恥を知れ」。これは創設者であり、日本の女子教育界の草分け的な存在でもある大妻コタカのことばですが、本来の意味を知らない人からすれば、少し乱暴な印象を受けるかもしれません。このことばは決して他人に対して発しているのではなく、人に見られたり、聞かれたりして恥ずかしいような行動をしていないかと、“自分を戒める”ためのことばだそうです。

また同系列校で使われている「ごきげんよう」

という挨拶にも、当時の女性を取り巻く社会情勢を反映したエピソードがあります。1908年に裁縫と手芸の家塾として創立された大妻学院ですが、1919年には日本初の夜学部を設置。昼間仕事をして家計を助けている女性が、さらに実技を身につけて自立ができるようにと開設されたものでした。

夜間部の生徒たちは、仕事をする必要のないお嬢様たちが帰宅するころに登校します。双方の生徒がすれ違ったときに、夜間部の生徒が引け目を感じないように、「ごきげんよう」の挨拶を採用したそうです。

現在では気取った挨拶と思われがちな「ごきげんよう」ですが、そこには日頃から挨拶や感謝の気持ちを言える女性に育ってほしいと願った創設者の想いと配慮がうかがえます。

「ごきげんよう」は他にも●跡見学園や●東洋英和女学院、●学習院女子などでも創設時からの伝統として採用されています。代々受け継がれてきた挨拶や習慣からも、その学校の歴史＝風土＝校風を探ることができます。

首都圏の私立中高一貫校には 宗教系が多い！

首都圏の私立中高一貫校には、その設立基盤



毎年多くの男子受験生から高い支持を集める浅野。広大な敷地内の約半分は「銅像山」と呼ばれる自然林が占め、頂上からは創設者の浅野總一郎が生徒たちを温かく見守っています。

から、宗教の理念を教育の柱にしている学校が多数あります。その数は全体の3分の1に及び、多くはミッションスクールと呼ばれるキリスト教系（カトリック・プロテスタント）の学校になりますが、なかには仏教系や新興宗教系もあります。

よく、宗教系の学校に入学すると「入信を強要されるのではないか」と心配される方がいますが、決してそのようなことはありません。むしろ人格形成に大切な中高6年間に宗教を背景とした教を学べることは、「豊かな人間力を育む」という意味でも、プラスに作用する面が多いでしょう。

例えば、多くのミッション・スクール（カトリック・プロテスタントともに）で掲げられてきた「Men for Other's (For Other's) =他者のために生きる」というスローガンも、「他人を思いやり、奉仕の気持ちを大切に生きて生きる」という意味で、この言葉がキリスト教系の私学の校風や教育姿勢の形成に果たした役割は非常に大きいといえます。

仏教系の私学にも「他者への思いやり」や「人間の尊厳」、「いのちの大切さ」を教える学校が多くあります。比較的穏やかで、温かな雰囲気を持つ学校が多く、これも公立学校とは違った特色を形成する私学ならではの校風といえるでしょう。

私立中高一貫校のルーツでもある 男子校・女子校の存在

私立中高一貫校を目指す受験生親子にとって、「共学にするか別学（男子校・女子校）にするか」は学校選びの重要なポイントです。おそらく、今この冊子を手に行っている保護者の皆さんの多くは、「共学が当たり前」の時代と環境のなかで育ってきた世代ではないでしょうか。

すでに全国の公立中学校や公立高校の大半が共学となっている現代では、男子校・女子校はすでに“少数派”であり、そのことが私学の最



2014年の共学化以来、女子からも高い人気を誇る安田学園 中学棟からの眺めは抜群です！

たる特徴となっています。

男子校には、もともとの（旧制中学校の時代からの）伝統からか、学業に向かう姿勢は厳しさを持つ反面、かつては「バンカラ」ともいわれただらかさや、とても自由な校風を持つ私学が多くありました。

一方、女子校の多くは、明治の初期期までは女子に与えられなかった「学問の場」を設けるために創立されました。当初は家政や裁縫、商業系の学校としてスタートした女子校も多くありましたが、時代を経て高等教育（大学）へ進学するための学校へと変化しました。そうした女子校には、躰や日本文化も大切にする学校が多く、また女子だけが学ぶ環境が大切にされたため、独自の文化や「女子校らしさ」が生まれ、それが校風として醸成されたともいえます。

こうした設置形態の違いと、それぞれの特色や魅力を知り、わが子に合った（保護者がわが子に望む）タイプの学校を選ぶことも、志望校を選ぶうえでの大切なポイントになります。

もともと、明治～大正時代に創立された多くの私立学校は、男子だけの学校、または女子だ



特集 “私学の校風”を感じてみよう。 ～わが子に合ったタイプの私学を探すために～

けの学校としてスタートした経緯があります。男女共学（共修）が一般的になる前の時代、たとえば創立から百年以上の歴史を持つ私学は、ほとんどが男子校、女子校という形態で長い伝統を形作ってきました。古くは旧制の高等学校、高等女学校を見ても、公私ともにすべて男子校、女子校だったことがわかります。

早くから大学進学でも高い実績をあげてきた開成、麻布、武蔵、女子学院、フェリス女学院、雙葉、桜蔭、横浜共立学園などが、いずれも男子校、女子校である背景には、そのような経緯があるのです。

つまり、これまでに高い成果をあげてきた私立による「中高6年間一貫教育」のルーツは、もともと男子校・女子校にあったという見方もできるのです。

しかし、戦後の新たな民主主義教育と新学制が導入された際に、公立中学校はすべて共学となり、公立高校も（北関東から東北エリアの一部の県立校を除いて）ほとんどが共学校として再スタートしました。

そして、男女共学が自然な形として世の中に浸透していくなかで、私学にも共学校が生まれ、あるいは男子校、女子校から共学化する私学も年々増えてきたのです。とくに1970年代後半（昭和50年代なかば）以降に新設・再開された私立中学校の多くは、共学校としてスタートしたか、あるいは開校後に共学化に踏み切り、現在に至っている学校がほとんどです。現在では先の伝統校と競い合うほどの高い進学実

績をあげるようになった渋谷教育学園幕張、同渋谷などの共学校や、近年注目を集めている三田国際学園、開智日本橋学園、安田学園、そして2018年から共学化が予定される青山学院横浜英和、八雲学園、文化学園大学杉並などは、いずれも比較的新しい時期に誕生した（生まれ変わった）、いわば“ニューウェーブ”の私学といえるでしょう。

今こそ見直したい！ 男女別学の意義を考える

徐々に私学にも波及してきた「男女共学化」。しかし、先にあげたような長い伝統を持つ私学の男子校、女子校が、これまでに高い教育の成果をあげ、多くのファンを形成してきた背景には、やはり男子校、女子校ならではの魅力やメリットがあります。

男子校、女子校の良さは、その学校を卒業した方やわが子を男子校、女子校に通わせた経験のある保護者でしたらよくご存知だと思います。しかし逆にいうと、そういう身近な経験がない方にとっては、男子校、女子校のイメージは想像しにくいものです。

すでに小学生のお子様を持つ皆さんも実感していると思いますが、男子と女子の精神的・身体的な成長にはスピード（リズム）の違いがあります。

わかりやすい例をあげると、一般的に小学校高学年から中学1～2年の頃までは、男子と女



来春2018年から共学化が予定されている八雲学園（左）と文化学園大学杉並（右）。男子受験生の選択肢が増えることで、両校周辺の受験地図にも大きな影響がでることが予想されます。

子の精神年齢は、女子の方が高く、1歳～1歳半の違いがあるといわれています。つまり、その間に男子は男子だけで、女子は女子だけで学ぶことは、学習指導の場面でも生活指導の場面でも大きな意味や効果があることが、すでに多くの教育現場で語られているのです。またそうした実証データも海外の研究には数多くあるとされています。

とくに教科教育の場面では、男子の理解や良い反応を促す質問の投げかけ方（教授法）と、女子に対するそれとでは、大きな違いがあります。たとえば男子に少し難しい問題をゲーム感覚で競うように投げかけると反応が良く、逆に



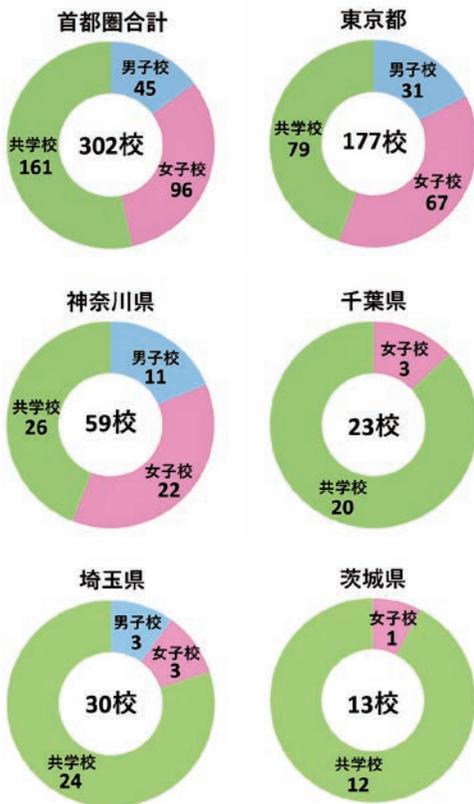
2009年の校名変更以降、急速な学校改革と先進教育で高い人気を集めている東京都立大学等々力「アブレス・オブリージ」の精神のもと、人間の育成にも力を入れています。

女子には事前に丁寧な説明をしたうえで、確実に達成感を得られるような組み立てで、授業や問題の投げかけをしたほうが有効との報告もあります。つまりそれぞれの特質に合った授業や学習指導ができるのが、男子校、女子校の大きなメリットなのです。

いまでも、難関大学への合格実績（合格者数）で、全国上位を占める学校には、圧倒的に男子校、女子校が多いのは、そうした特質をふまえた指導や学習環境によるところが大きいのではないかと分析する教育関係者もいます。

一方、生活面の指導でも、すでに中1の段階で精神的にも成熟しつつある女子へのアプローチと、まだ小学生の雰囲気抜けきらない男子に対するアプローチとでは、当然ながら違った形のほうが効果的です。とくに「キャリア教育」の場面などでは、この年齢の男子と女子とでは反応や吸収の違いが顕著に表れます。それゆえ、ほとんどの女子校では、中2くらいの早い段階から将来のキャリア（進路や職業選択）を考えさせるプログラムを設けていますが、男子校の場合には、もう少し先の段階（高学年）まで待ってから体験させるケースが多いのです。

社会的な意識の芽生えや、現実の目標を定めるのが早めな女子には、それに合ったタイミングで示唆を与える。また女子に比べてそうした意識の芽生えが遅い男子には、中学生の間に学習習慣をベースとした学力の土台を固めさせ、社会性や目標意識が高まった段階で、一挙に各



※かえつ有明・国学院久我山・自由学園・桐蔭学園・桐光学園の男女別学校は共学校として集計しています。
 ※2018年4月より共学化予定の文化学園大学杉並・八雲学園・青山学院横浜英和は共学校として集計しています。
 ※2018年入試で中学募集を行う学校を集計しているため千代田女学園は含まれていません。



特集 “私学の校風”を感じてみよう。 ～わが子に合ったタイプの私学を探すために～

自の希望する進路に向けてラストスパートをかけることを前提に、ゆったりと進路や職業を考えさせている私学が多いのです。つまり、こうしたさまざまな面で、「男子だけ」「女子だけ」の環境だからこそ、“できること”、“行いやすいこと”があるのです。

もっとも子ども（生徒）自身からすれば、各自の性格やタイプによって、「男子だけ」「女子だけ」の環境のほうが、伸び伸びと過ごせるという子もいます。とくに小学生時代に、大人びた女子や、子どもっぽい男子の存在をわずらわしく感じていたような子どもにとっては、この中高6年間という一時期に限って、“男女別々”の環境のほうが過ごしやすくと感じる子も少なくありません。

身近な例をあげれば、趣味やスポーツなど、一つのことに熱中することが好きな男子には、女子の視線を意識せずにはいられる男子校のほうが、そうした部活動などに打ち込みやすい雰囲気があります。こうした思春期特有の問題に対応できるのも、男子校、女子校の魅力といえるでしょう。

それぞれの雰囲気を知るには まず足を運んでみることに！

男子校・女子校・共学校や各タイプの私学の雰囲気の違いを知るためには、やはり各私学に足を運んでみるのが大切です。在校生がどのような表情で過ごしているかを自分の目で見ることで、お子さんにも、きっと自分なりの好みや希望が出てくことと思えます。

実際、こうした入学前のリサーチをしたうえで学校を選んだ先輩たちに入学前と入学後のイメージギャップを尋ねると、男子校では「もっと騒がしくて大雑把かと思っていたが、意外と落ち着いていて、優しい先輩や先生が多かった」といった感想が、女子校では「もっとお嬢様学校っぽい雰囲気かと思っていたが、みんな明るくてうさいくらい元気だった」といった感想が多く聞かれます。

つまり、それだけ大らかで、先生や先輩に温かく見守ってもらえて、友人たちと和やかに過ごせる環境や風土が、多くの私立中高一貫校にはあるということです。私学には創設以来培われていた、さまざまな“個性”があり“顔”があります。錯綜する情報を精査し、実際に自分の目で確認することを忘れずに、わが子に合った学校選びを心がけてください。

●男子校、女子校、共学校の特徴

男子校

- 女子の視線を気にせず好きなことに打ち込める。
- 体育祭や文化祭などが盛り上がる。
- 運動系のクラブ活動の選択肢が豊富。
- 団結力が強い。

女子校

- 大学の現役進学率が高い。
- 学校が女性向けに設計されている。
- 礼法などの伝統文化を重んじる学校が多い。
- 男子に頼れないので自立した女性に育つ。

共学校

- 異性との相互理解を深めることができる。
- 比較的新しい学校が多い。
- 明るくオープンな雰囲気の学校が多い。
- 早くから社会の構成を学ぶことができる。

わが子にとってベストの 受験校選択をするポイントは？

～ 10月以降、盛んに行われる「説明会」や「学校行事」の機会に確かめよう～

わが子の受験校を選ぶうえで、何を物さしにするのか。家庭の考え方、保護者の期待、本人の将来への希望、本人の性格・タイプなど重視したい点は多々あります。

ここでは学校説明会や見学の機会に、ぜひ抑えておきたい14のポイントをご紹介します。

①教育理念や目標、その学校の6年間で身につけられる力が、わが子が社会に巣立つ2025年以降の新しい社会に求められるものか？

②その教育の方向性が、来るべき「2020年大学入試改革」にも対応し得るものか？

③今後の社会のグローバル化や激しい変化を見据え、そこで生き抜く力を育ててくれる教育内容かどうか？

④校風（カラー）が本人の性格に合っているか？

⑤男子校、共学校、女子校のタイプは、家庭の希望と合っているか？

⑥宗教色のある私学の場合、その背景（理念）に理解と賛同姿勢をもてるかどうか？

⑦進学校か付属校か、あるいは半進学校（半付属校）か？

⑧自由な学校か、規律正しい学校か？

⑨学習指導のスタンスや体制は、家庭の希望に合っているか？

⑩大学進学状況は納得いくものかどうか？また、将来性についてはどうか？

⑪クラブや学校生活はのびのびできるか？

⑫わが子が学校に楽しく通えて、友人関係や雰囲気溶け込めるかどうか？

⑬通学には無理がないか？

⑭その学校が、危機管理の面も含めて「安心して通わせられる」場所かどうか。

さらに、ここ数年の入試では、公立学校が進められている“教育の自由化”政策に対して、各私学がどのような（オリジナルの）姿勢を打ち出しているかが、保護者のニーズと照らし合わせたときの大きな焦点となっています。

中高6年間の学習指導のノウハウや成果で、私学が公立中高をリードしていることは、すでに多くの保護者が認めるところ。そのうえで、私学ならではの教育のもと、21世紀を担う子どもたちが「より良く生きる」力を身につけるために、どのような“プラスアルファ”を与えてくれるのか。こうした点をトータルに見たときに、わが子の受験校として納得できるかどうか、親子の意思決定の大きなポイントになってくるのです。



10月以降は各私学で「オープンスクール」や「授業体験会」が実施されます。こうしたイベントに親子で参加すると、子どもたちのモチベーションアップにつながります。